シリーズ　私の一冊の本

国際関係学部　　竹部 歩美 先生

井上 靖　著

『 敦煌 』

閲覧室１階　918.68//I57//15　新潮社ほか

古い時代の物語や日本語に関心を持っているためでしょう、国の内外を問わず、文字の記された土器が発見されたとか、古い時代の文献が見つかったとか、そういった話題に私は強い関心を抱きます。だからでしょうか、いわゆる敦煌文書のことが描かれる『敦煌』には、井上靖の西域物のなかでも私は殊に惹かれます。

莫高窟の第 17 窟に封じられていた無数の経典類―敦煌文書は、1900 年に王圓籙によって発見され、イギリスのスタイン、フランスのペリオらによって国外に持ち出されて世界中に知られることとなったものです。敦煌文書が誰の手によって何故この場所に運び込まれたのか、史実は定かではないとされていて、西夏の敦煌侵攻に際して焚書を恐れた敦煌が意図的にこの場所に秘匿したのだとする説や、西夏が他国の侵攻から経典類を守るべくここに密蔵したのだとする説、あるいは、第 17 窟は不要な文書類の仮の保管場所だったのであって貴重文献の保管が目的ではなかったとする説などがあると言われています。

小説『敦煌』では、敦煌文書は主人公・趙行徳らの手によって莫高窟に秘匿された―進士の試験に失敗した行徳は、街で肉塊として売られていた女から西夏文字の記された布を渡される。行徳はそれを読解すべく西夏に向かう。そのため、西夏の敦煌侵攻にも居合わせることとなる。行徳は敦煌が持つ大量の経典が戦火で灰燼に帰することを惜しみ、戦乱に乗じて敦煌の太守曹氏の宝物を得ようとする尉遅光に便乗して莫高窟の小穴に経典類を塗り込めることに成功する。―と描かれています。

平安時代の物語の写本を読解する作業を私は行っていますが、その日々の作業は、当然ながら、調査対象となる文献資料があってはじめて成り立つものです。ですから、何時か誰かが様々な目的を持って書写し大切にしていたであろう冊子や巻子が、『敦煌』の経典類のような激動の史的背景を持つものではないとしても、また仮にそれが当時は紙屑であったとしても、現在私たちの元にあることを、ありがたく思わないではいられません。『敦煌』を読むたびに、こうした思いはなお一層強くさせられます。同時に、『敦煌』は、私の目の前にある写本に記されている一言一句たりともないがしろにしてはならないという気持ちをも強くさせてくれるのです。